

吉野川橋

吉野川橋は、吉野川に架かる主要地方道徳島鳴門線（旧国道 11 号）の橋で、徳島市の応神町と助任町を結んでいます。吉野川橋が昭和 3 年に完成するまでは、明治 19 年に沖島村（現徳島市川内町）の豊川仲太郎が淡路街道の交通の便を図るために架設した古川橋という木橋の賃取橋がありました。橋の規模は橋長約 818m、幅員 1.81m で、南岸から約 30m は舟橋でした。古川橋はいわば吉野川橋の原点であり、吉野川橋の北詰には豊川仲太郎の功績を讃えて「豊川翁之碑」が建立されています。しかし、この橋は毎年のように吉野川の出水によって被害を受け、度々交通の途絶を招いていたため、架橋の必要性が強く叫ばれていました。

大正 8 年に道路法が制定されたことを契機として、徳島県は大正 10 年に県下 11 大橋の架設を計画し、最初に古川橋を永久橋に架け替えることを決定しました。大正 13 年に県は豊川仲太郎から賃取橋の経営権を買収し、県営に移管した後、大正 14 年 11 月に架け替え工事を開始し、3 年 2 ヶ月の期間を費やして昭和 3 年 12 月に完成しました。古川橋という名称は、完成前の昭和 2 年 12 月に吉野川橋に改称されました。吉野川橋は橋長 1,071m、幅員 6.06m の 17 径間曲弦ワーレントラス橋で、架設当時、橋の長さとしは東洋一で、全国から見学者が絶えなかったと言われています。架橋工事と同時に、吉野川橋南端～助任西町八幡神社間（幅員 10.9m）及び吉野川橋北橋～鯛浜間（幅員 8.18m）の取合道路約 2,810m の新設も完成しました。

吉野川橋の開通式は吉野川南岸の広場で催され、渡り初めは瀬戸町（現鳴門市）の一家三夫婦が自動車に乗り込み、これに続いて県知事らの自動車 15 台を列ねて行われました。空には大阪から飛来した飛行機が乱舞し、式典に参加した 4 万人の群衆は開通万歳を叫びました。祝賀行事は、2 日間にわたり阿波踊り、人形芝居、もち投げ、落語などの余興があり、橋の畔では 80 余頭が参加して競馬大会が行われました。

開通後、川北には相次いで工場が建設されるなど、吉野川橋は地域開発に貢献するとともに、徳島市と鳴門など県北部を結ぶ南北交通の大動脈としての役割を果たしてきました。昭和 40 年には、歩行者や自転車の安全を確保するため、橋の両側に幅員 2m の歩道橋が併設されました。その後も自動車の通行が増加し、橋上で交通渋滞が起こるようになり、昭和 47 年に国道 11 号の吉野川バイパスの一環として約 1km 下流に吉野川大橋が架けられました。吉野川橋は、交通量の増加に加えて荷重の増加という負担もあり、度々補修、補強が行われてきましたが、今も現役で活躍しています。

<参考文献：徳島県教育委員会編「徳島県の近代化遺産」2006 年、徳島市史編さん室編「徳島市史 第三巻」1983 年、徳島橋梁技術者の会編「四国三郎 吉野川の橋」1999 年など>

